動向

王家埋葬地から見たクシュの歴史的諸問題

坂本 翼

Royal Cemeteries of Kush: Historical Problems and Perspectives

Tsubasa SAKAMOTO

キーワード：クシュ、編年、古代エジプト第25王朝時代、ナパタ期、メロエ期

Key-words: Kush, chronology, 25th Dynasty of Egypt, Napatan period, Meroitic period

Ⅰ．はじめに

アフリカ大陸北東部、アラビア半島から紅海を隔てた対岸、その中央に、南はエチオピアから西はリビアまで続く砂漠地帯が広がっている。スーダン共和国と南スーダン共和国にまたがるこの砂漠地帯には、かつてクシュ（Kush）と呼ばれる民が住んでいた。センウセレト1世の治世に初めて歴史的言及がなされるこの民は、ケルマ(Kerma)を拠点的集落として勢力を強めつつあったことが知られているが、第二中間期の終わりから新王国時代の初めにかけて弱体化し、その後、長らくエジプトの支配下に置かれることとなる。続く第三中間期、度重なるリビア人の侵入によって今度はエジプトが著しく疲弊し始めると、クシュはカシュタ（Kashta）の元で体制を立て直し、ピアンキ（Piankhy）、シャバカ（Shabaqo）、シャバタカ（Shebitqo）、タハルカ（Taharqo）、タヌタマニ（Tanutamani）という5人の王の下でエジプトを手中に収めるに至る[1)]。カシュタからタヌタマニまでのこの一連の統治期間が、いわゆる古代エジプト第25王朝時代である。

しかしながら、近年、第25王朝時代の基本的理解は音を立てて崩れ去ろうとしている。というのも、後述するように、該期の諸王の即位順には深刻な疑義が提出されているからだ。ドイツの在野研究者が示したこの疑義によれば、シャバカとシャバタカの前後関係は逆転させなければならないという。つまり、これまで積み重ねられてきた第25王朝時代の歴史考証は、その前提からして間違っているというのである。エジプト学の常識を揺るがすこの主張に対しては、当然ながら慎重な姿勢が求められて然るべきであるが、もしこの主張が的を射ているとすれば、エジプト学のみならずこれに端を発するクシュの研究も根本的見直しを迫られることになる。こうした状況にあっては、第25王朝時代を含めたクシュの歴史的諸問題を一度整理しておくことも決して無意味ではないであろう。

以上を踏まえる本稿は、次の三段構成を採る。まず、第25王朝時代以降のクシュの王名表を手早く俯瞰し、現行編年を確認する。次に、王名表を根底から支えている王家埋葬地に視点を移し、そこに潜む幾つかの歴史的問題を指摘する。最後に、シャバカとシャバタカの即位順へ立ち戻り、上述の疑義がいかなる史料に基づいているのかを紹介する。議論は極めて多岐に渡っており、筆者の力量不足ゆえにその全てを開示することは叶わないが、クシュ、あるいは第25王朝と接触関係にあったアッシリア帝国の研究の一助となることを期待し、記す。

Ⅱ．第25王朝時代以降のクシュ

第25王朝時代にカシュタ、ピアンキ、シャバカ、シャバタカ、タハルカ、タヌタマニという王が含まれ得ることは、上述した通りである。カシュタの前任者としてアララ（Alara）なる人物も知られているが、その存在を立証し得る考古遺物が乏しいためやや不鮮明と言わざるを得ない。いずれにせよここで重要なのは、第25王朝時代を境としてクシュが多くの史料を残すようになることだ。まず聖刻文字で、続いてメロエ文字で残されるようになるこの史料のまとまりは、出土点数においてエジプトには遠く及ばないものの、王名表（表1）を編纂するための欠かせない情報を提供している。

ここに挙げたのは、現時点で最も新しい王名表である。一瞥すればわかるように、本稿執筆時点では約70人の王及び女王の名前と埋葬地が判明している。埋葬地を示す略号（Ku., Nu., Bar., Beg.S., Beg.N.）は、後述するアル＝クッル（el-Kurru）、ヌリ（Nuri）、ジェベル・バルカル（Jebel Barkal）、メロエ（Meroe/Begrawiya）からそれぞれ採ったもので、埋葬施設の番号がこれに続く。いくつかの例外を除き歴年代との照合は困難だが、大局的に見れば、埋葬地がアル＝クッルからヌリ、ジェベル・バルカル、メロエへ移り変わってゆくさまを看取することができるだろう。クシュの年代区分を支えているのはこの移り変

西アジア考古学　第19号　2018年　47-56頁
© 日本西アジア考古学会

わりである。つまり、王及び女王がアル＝クッル、ヌリ、ジェベル・バルカルに埋葬される前8世紀から前3世紀の初めまでを、当該地域の古代名に倣ってナパタ期（Napatan period）と呼び、王がメロエに埋葬される前3世紀の初めから後4世紀の半ばまでをメロエ期またはメロエ王国時代（Meroitic period）と呼ぶ。なお、カシュタからタヌタマニまでの統治期間は第25王朝時代として区別することが一般的であるが、この時代をナパタ期の一部とする研究者もおり注意を要する。

各埋葬地に視点を移す前に、発掘略史をここに記しておく。上述した4つの埋葬地は、ハーバード大学・ボストン美術館合同調査隊によって1916年から1923年まで発掘された。調査主任のG. A. ライスナー（Reisner）はその成果を世に問うことなく没したが、彼の没後、D. ダナム（Dunham）が正式な報告書の出版に至っている（Chapman and Dunham 1952; Dunham 1950, 1955, 1957, 1963）。今世紀に入り各埋葬地の再調査が活発化しつつあるが、その成果がまとまって世に現れるのは暫く先のことであり、現状、ダナムの報告書が唯一の基礎資料と言って良い。以上を念頭に置き、各埋葬地を詳しく見てゆくことにしよう。

Ⅲ．クシュの王家埋葬地

1．アル＝クッル（図1）

表1からわかるように、クシュの王墓はまずアル＝クッルに造営される。スーダンの首都ハルツームから約350 km下流に位置するこの遺跡には、少なくとも6基の墳丘と20基のピラミッドが存在し、後者には、タハルカを除く第25王朝時代の諸王（と王妃）が埋葬されてい

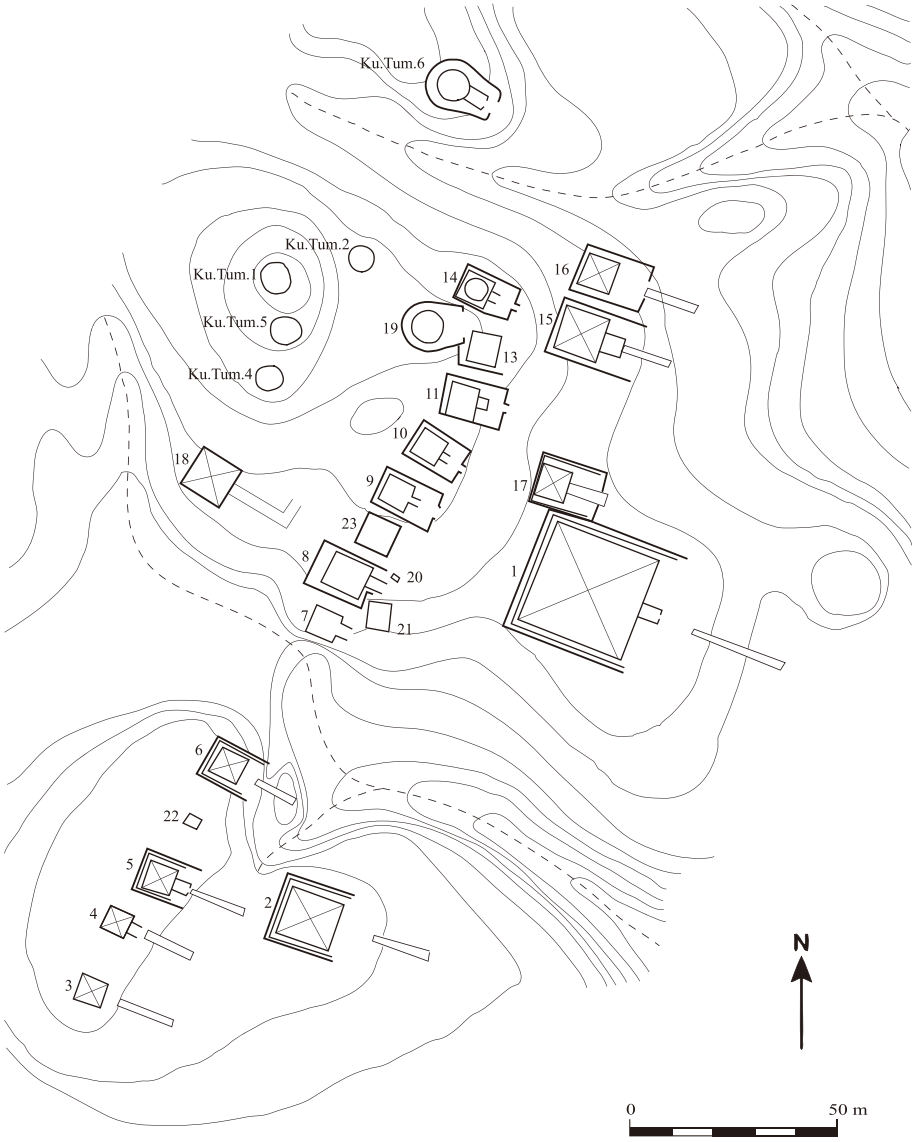

図1　アル＝クッル、墓域平面図（Kendall 1999: Fig. 1を再トレース）

表1　クシュの王名表（Török forthcoming Appendix より作成）

年代	埋葬地	王名
795–775	Ku.9?	アララ（Alara）
775–755	Ku.8?	カシュタ（Kashta）
755–721	Ku.17	ピアンキ（Piankhy）
721–707	Ku.15	シャバカ（Shabaqo）
707–690	Ku.18	シャバタカ（Shebitqo）
690–664	Nu.1	タハルカ（Taharqo）
664–656	Ku.16	タヌタマニ（Tanutamani）
	Nu.20	アトラネルサ（Atlanersa）
	Nu.3	センカマニスケン（Senkamanisken）
	Nu.6	アンラマニ（Anlamani）
c.600	Nu.8	アスペルタ（Aspelta）
	Nu.9	アラマテルコ（Aramatelqo）
	Nu.5	マロナケン（Malonaqen）
	Nu.18	アナルマケイェ（Analmakheye）
	Nu.10	アマニナタキレブテ Amani-nataki-lebte
	Nu.7	カルカマニ（Karkamani）
	Nu.2	アマニアスタバルコ（Amaniastabarqo）
	Nu.4	シアスピコ（Si'aspiqo）
	Nu.19	ナサクマ（Nasakhma）
	Nu.11	マロウィアマニ（Malowiamani）
c.430	Nu.16	タラカマニ（Talakhamani）
	Nu.12	イリケアマノテ（Irikeamanote）
	Nu.17	バスカケレン（Baskakeren）
c.400	Nu.13	ハルシヨテフ（Harsiyotef）
	Nu.14	アクラタン（Akhratan）
	?	アマニバキ（Amanibakhi）
	Nu.15	ナスターセン（Nastasen）
c.330	Bar.11? 14?	アクティサネス（Aktisanes）
	Bar.11? 14?	アリアマニ（Aryamani）
	Bar.15?	カシュ ... アマニ（Kash[...]amani）
	Bar.?	イリケピアンキコ（Irike-Pi(ankhi)-qo）
	Bar.7?	サブラカマニ（Sabrakamani）
c.275	Beg.S.6	アルカマニコ（Arkamaniqo）
	Beg.S.5	アマニスロ（Amanislo）
	Beg.N.4	アマニテカ（Amanitekha）
	Beg.N.?	*Ssp-'nk-n-Imn Stp.n-R'*
	Beg.N.53?	アルネカマニ（Arnekhamani）
c.200	Beg.N.7	アルカマニ（Arqamani）
	Beg.N.9	アディカラマニ（Adikhalamani）
	Beg.N.8?	[...]*mr*[...]*t*
	Beg.N.10	?
	Beg.N.11? 21?	シャナカダケト（Shanakadakheto）
	Beg.N.12?	タネイダマニ（Taneyidamani）
	?	パ [.] ケダテコ（Pa[.]khedateqo）
	Beg.N.13	ナキリンサン（Naqyrinsan）
	Beg.N.20	*k3 nht* [...]
c.100	Bar.1	?
	?	アクラカマニ（Aqrakamani）
	Bar.2?	テリテカス（Teriteqas）
	Bar.4?	アマニレナス（Amanirenas）
(BC)	Bar.6	ナウィデマク（Nawidemak）
c.1	Beg.N.6	アマニシャケト（Amanishakheto）
(AD)	Beg.N.2?	アマニカバレ（Amanikhabale）
	Beg.N.22	ナタカマニ（Natakamani）
	Beg.N.1	アマニトレ（Amanitore）
	?	ショラカロル（Shorakaror）
	?	アマナカレケレム（Amanakhareqerem）
	Beg.N.16?	アマニタラキデ（Amanitaraqide）
	Beg.N.36?	アリイェセボケ（Aryesebokhe）
	Bar.9?	?
	Bar.10?	?
	Beg.N.17	アマニテンモミデ（Amanitenmomide）
	Beg.N.18	アマニカタシャン（Amanikhatashan）
	Beg.N.19	タレケニワル（Tarekeniwal）
	Beg.N.34?	アリテンイェセボケ（Ariteneyesebokhe）
	Beg.N.29?	タキデアマニ（Takideamani）
253	Beg.N.28	テコリデアマニ（Teqorideamani）
	Beg.N.24?	マロコレバル（Maloqorebar）
	Beg.N.27?	タメロルデアマニ（Tamelordeamani）
	Beg.N.51?	イェセボケアマニ（Yesebokheamani）
	Beg.N.26	?
c.350	Beg.N.25	?

る。ただし、ピラミッドの被葬者が豊富な出土史料から特定されている一方、墳丘の被葬者は多くの謎に包まれている。というのも、盗掘されたその埋葬室にはめぼしい史料が残されていなかったからだ。Ku.Tum.6 で見つかった一点の銘板を唯一の例外として挙げることができるものの、そこには *K3ml[y]* という人物名が施されているだけで、必ずしも出自の手掛かりにはならない。

こうした状況のなか、アル＝クッルの研究は主に二つの方向性において進められてきた。一つはピラミッドを対象としたものであるが、これは第 25 王朝時代の諸王の在位年数や血縁関係をめぐって積み重ねられてきたきらいがあり、また、別の場所でもすでに詳しく触れられているため（齋藤 2013, 2014）本稿では深く立ち入らない。もう一つは墳丘を対象としたものであり、とりわけその起源をめぐって短期編年（short chronology）と長期編年（long chronology）の二つが対立を続けている（Kendall 1999）。短期編年は墳丘の造営開始を第三中間期の半ば（885–835 BC）に求め、長期編年は第三中間期の初め（995–975 BC）に求めようとする。両編年の違いはわずか 100 年足らずに過ぎないが、この違いは極めて重要である。なぜならば、墳丘の造営年代によって第三中間期のアル＝クッルの歴史像、さらには第 25 王朝の形成過程が大きく左右されるからだ。1990 年代には墳丘出土土器が論争解決の重要な手がかりとして期待されたが、そこから導き出された分析結果は、第三中間期の土器編年の未熟さを指摘するに留まった（Heidorn 1994: 126–127）。他方、以上のような閉塞感が急速に解消されつつあることもまた事実である。特に J. ブドカ（Budka）は、墳丘出土土器の類例が遠くアビドスに認められるばかりか、本類例が第 21 王朝時代後半から第 22 王朝時代半ば（960–800 BC）に年代付けられることを踏まえ、該期のアビドスとアル＝クッルに密接な交流があったことを明らかにしている（Budka 2014）。考古学的知見に裏打ちされた彼女の主張は説得力に富んでおり、今後、アル＝クッルの研究はここを出発点とする必要があるだろう。

2. ヌリ（図 2）

クシュの王墓は、続いてヌリに造営される。アル＝クッルから約 25 km 上流に位置するこの遺跡には、少なくとも 73 基のピラミッドと 6 棟の宗教建造物が存在し、宗教建造物はキリスト教時代（Nu. 100, 200, 300）とナパタ期（Nu. 400, 500, 600）にそれぞれ年代付けられている。一方のピラミッドは、タハルカからナスターセンに至る約 20 人の王を含んでおり、四隅で見つかった鎮壇具から被葬者の名前も大方特定されている（Reisner 1918）。

しかしながら、一体何故、タハルカは自らの埋葬地をアル＝クッルからヌリへ移したのであろうか。これこそが、ヌリをとりまく最も大きな疑問である。埋葬地の移転に少なからぬ社会変化が反映されていることは想像に難くないものの、その実態をめぐってはいくつもの見解が錯綜している。代表的な見解としては、タハルカが政治的独立を企てたとする説（Török 1997a: 184 n. 370; Bányai 2013: 76–

図 2　ヌリ、墓域平面図（Dunham 1955: Map を再トレース）

78）や、聖岩ジェベル・バルカルとの距離的及び宗教的接近を試みたとする説（Kendall 2008）が挙げられるが、いずれも推測の域を出ない。続くタヌタマニとアトラネルサもそれぞれ別々の遺跡に埋葬されていることから、該期の王家埋葬地がアル＝クッルとヌリを頻繁に行き来していたことは間違いないようである。以上の往来を政変に見立て、第25王朝時代の終わりにアル＝クッルとヌリの王族が対立していたとみなすのは確かに魅力的だが、現時点においてこの仮説を立証することは難しい。

3. ジェベル・バルカル（図3）

クシュの王墓は、続いてジェベル・バルカルに造営される。ヌリから約9 km下流に位置するこの遺跡にはおよそ25基のピラミッドが存在し、現行編年に従えば、少なくとも4基（Bar. 7, 11, 14, 15）が前4世紀と前3世紀の境に、同じく4基（Bar. 1, 2, 4, 6）が前1世紀の初めに年代付けられている。数世紀の断絶を挟んだ再利用をこれは示唆するもので、換言すれば、ここでもわれわれは埋葬地の移転及び往来という不可解な現象に直面するのである。再度問おう。一体、これは何を示唆しているのであろうか。

想定しうる回答は、現在のところ次の二つに絞られる。まず、表1の該当箇所に疑問符が附されていることからわかるように、ジェベル・バルカルの王墓の多くは状況証拠から推測されているに過ぎない。したがって、上述の現象を現行編年の誤りとして説明することも不可能なわけではない。一方、飽くまで現行編年の正しさを前提するならば、この現象の背景に何らかの政治的要因を想定することが許されるだろう。実際、このような方向性において解釈を進めたライスナーは、ジェベル・バルカルとメロエには当時別々の王朝が存在しており拮抗を見せていたと述べている（Reisner 1923: 63–67）。この解釈はS. ヴェニヒ（Wenig）によってのちに否定され（Wenig 1967, 1973）、

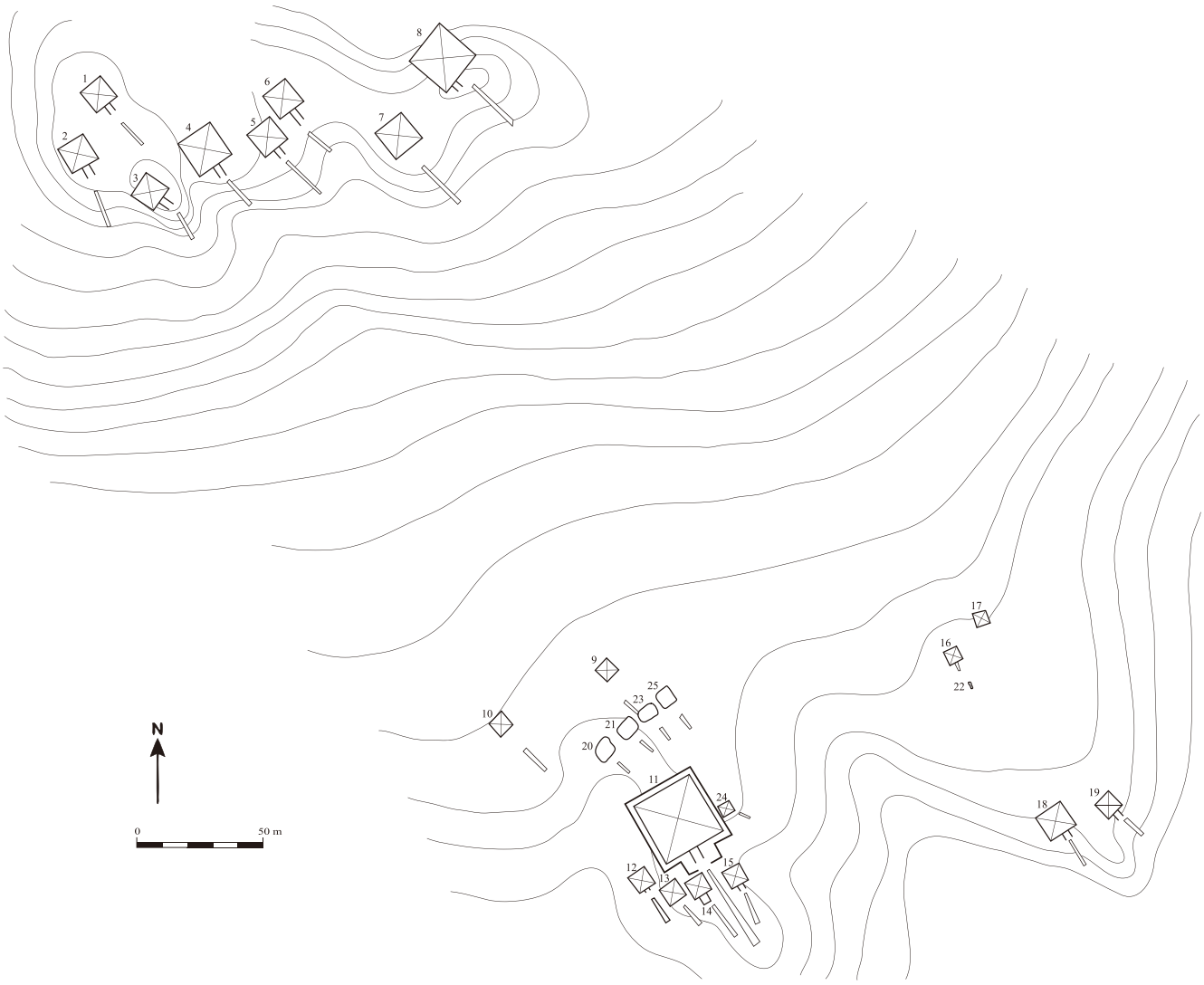

図3　ジェベル・バルカル、墓域平面図（Dunham 1957: Map Iを再トレース）

顧みられることはもはや殆ど無くなりつつあるが、ジェベル・バルカルの王墓が満足に特定されていない以上、ライスナーの解釈にも一考の余地を残して然るべきであろう。このように、ジェベル・バルカルの王墓には多くの不確定要素が伴っているが、いくつかの興味深い事実もまた明らかとなっている。その事実というのは、アクティサネスからサブラカマニにいたる 5 人の即位名がラムセス朝時代のファラオのものに酷似していることで、これを理由として、彼らはネオ・ラメサイド（Neo-Ramesside）の王と形容されることがある（Priese 1977）。該期のクシュがエジプトと密接に交流していた可能性はしたがって高い。ただし、この些細な指摘を除けば、ジェベル・バルカルの王墓はすべからく盗掘されており、依然多くを語ることができない。

4. メロエ

最終的に、クシュの王墓は、ジェベル・バルカルから直線距離で 250 km 以上離れたメロエに造営される。表 1 が示すようにメロエの王墓は南墓地（Beg.S.）と北墓地（Beg.N.）に分かれて造営されているが、年代的に古いのは南墓地である。第 25 王朝時代からナパタ期にかけて存続したこの墓地（図 4）では少なくとも 200 基を超える埋葬施設が検出されており、そのうち約 80 基がピラミッドを伴っている。そしてこれまで見てきた埋葬地と大きく異なり、無数の土坑墓もまた検出されている。墓域南西部へ寄り添うように造営されたこれら土坑墓はその分布範囲からして特徴的だが、一際目を惹くのは、少なからぬ量の副葬品が第 25 王朝時代に年代付けられていることである。言葉を変えればこれは、南墓地の年代的起源が該期にさかのぼるのみならず、その被葬者が第 25 王朝時代の諸王と密接な繋がりにあった可能性をも示唆している。南墓地が第 25 王朝時代の諸王によって併合されていたと考えることも、あるいはもっと大胆に、メロエが第 25 王朝の文化的発祥地になっていたという説が提唱されることもしたがってある意味当然の流れであった。

ところが、このような通説（Török 1997b: 15–20）は根本的な見直しを迫られつつある。上述した副葬品の多くは後世の混入品であった可能性が指摘され始めているからだ（Pope 2014: 5–33）。この指摘は、南墓地の被葬者と第 25 王朝時代の諸王の関係性に強く再考を迫るものである。さらにこの指摘によれば、メロエを第 25 王朝の文化的発祥地とする仮説もいくつかの問題を抱えている。まず、メロエが第 25 王朝時代以前に存在していたという確証が無い。確かに、近年増加しつつある炭素 14 年代測定結果は

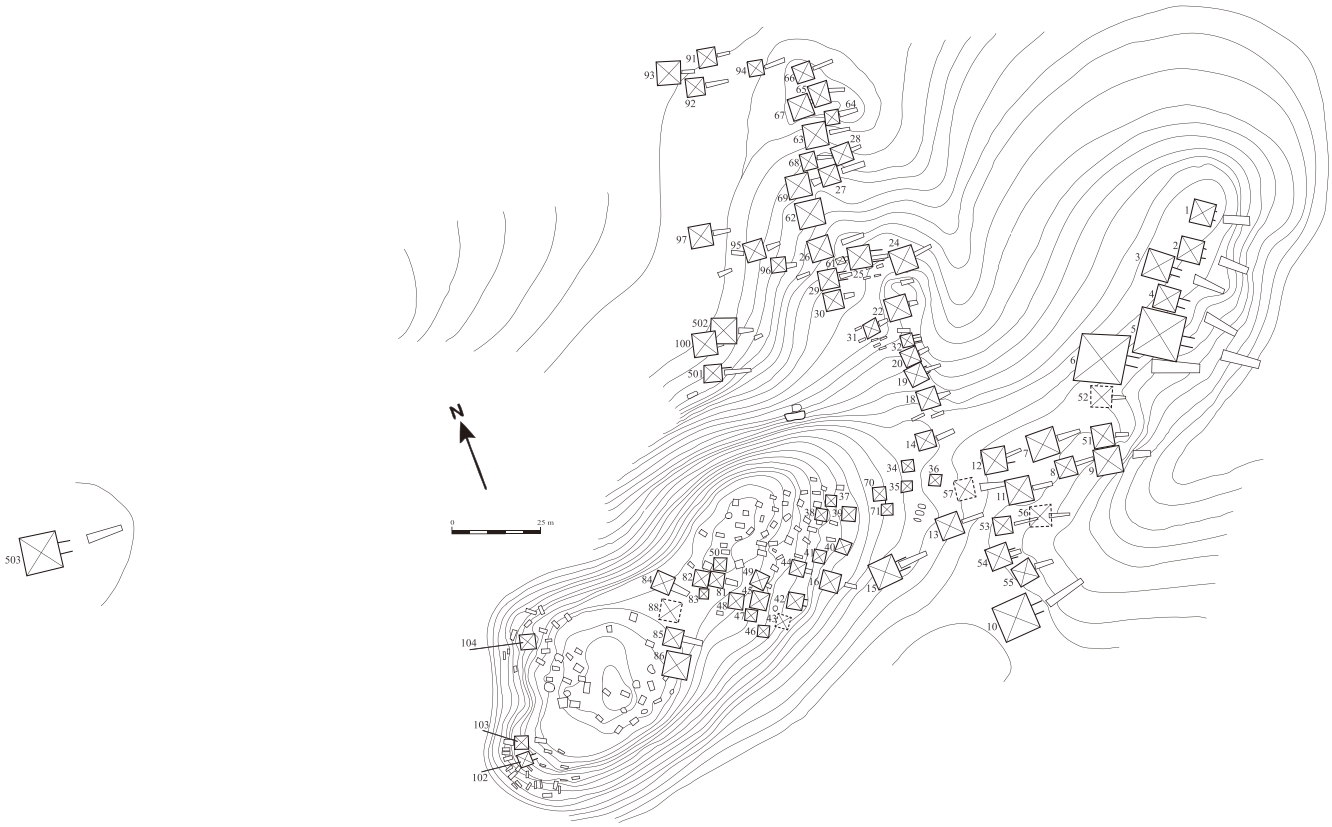

図 4　メロエ、南墓地平面図（Dunham 1957: Map III を再トレース）

第三中間期の年代を含み得るものとなっているが、この結果を無批判に受け入れることはいささか危険であろう。また、出土副葬品の中に「王の妻」あるいは「王の息子」という称号が散見されることから、南墓地の被葬者が第25王朝時代の諸王と血縁関係にあった可能性も否定できないわけではない。しかしここでも、副葬品は混入品であった可能性が近年指摘されていることを踏まえると、同被葬者を第25王朝時代の文脈に位置付けることには慎重さが求められて然るべきと言える。

南墓地をめぐる議論の行方は今後の研究に委ねざるを得ないが、ともかくも、クシュの王墓はやがて北墓地（図5）へ移る。40数基のピラミッドが立ち並ぶこの墓地は、

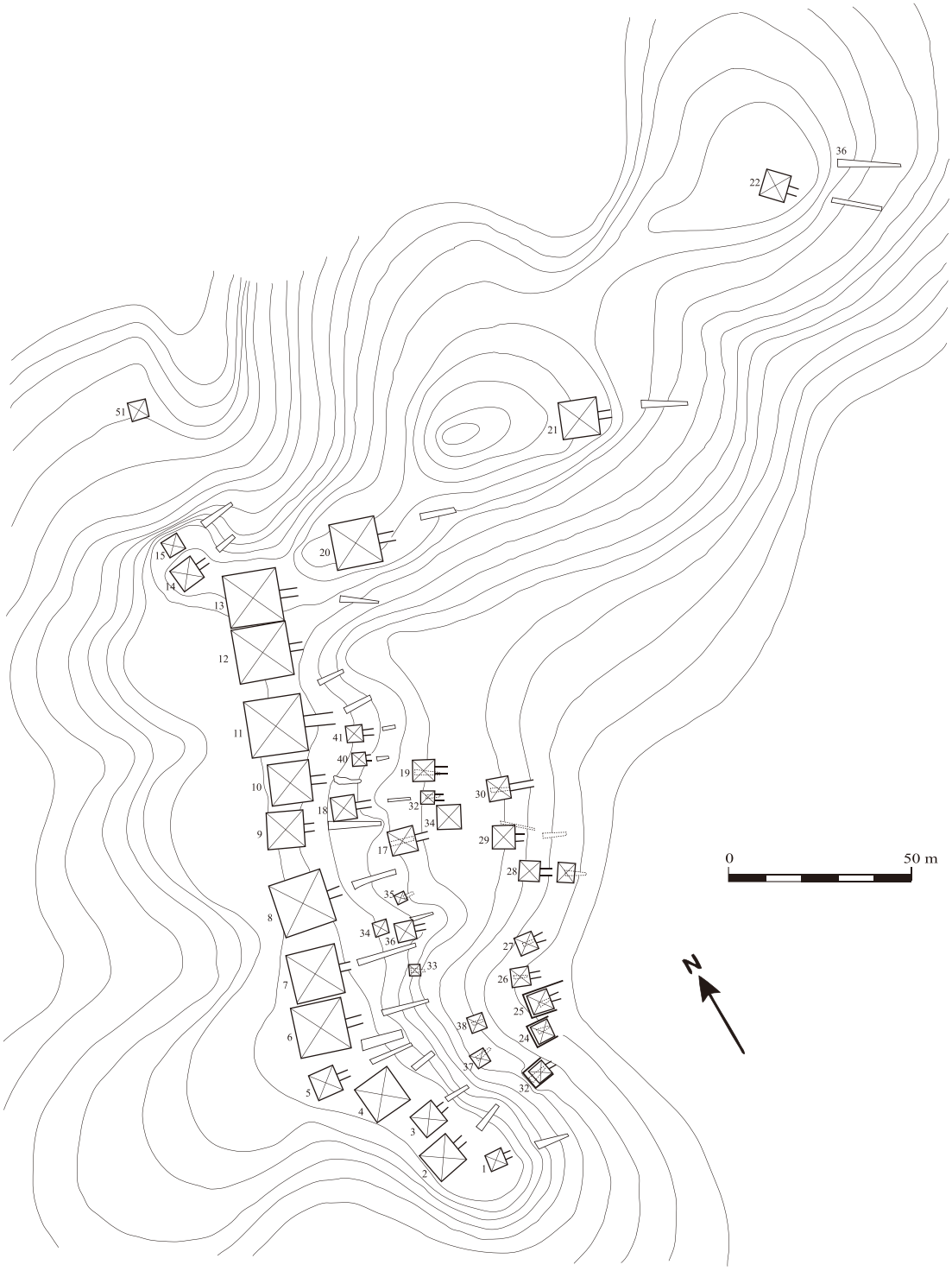

図5　メロエ、北墓地平面図（Dunham 1957: Map IV を再トレース）

王及び女王の埋葬場所としてその名を世に知られており、メロエ王国時代を語る上で欠かせない遺跡となっている。被葬者が定かでないピラミッドも確かに見受けられるものの、大方としては、葬祭殿内部の浮き彫りやカルトゥーシュからその特定が進められている。ただし、表1を眺めればわかるように、各ピラミッドの暦年代がほとんど突き止められていないことも指摘しておかねばなるまい。換言すれば、この曖昧さがメロエ王国時代の歴史考証を著しく困難なものとしている。正確な暦年代がわかっている唯一のピラミッドはBeg.N.28である。ここに埋葬されたテコリデアマニという王は、フィラエ島のハドリアヌス門の壁面に碑文を一点残しており、その中に、「本碑文はローマ皇帝トレボニアヌス・ガルスの治世3年に書かれた……」という一節がある（Griffith 1937: Ph. 416)。トレボニアヌス・ガルスは後251年に即位しているため、結果的に、テコリデアマニが後253年に在位していたことが少なくとも判明するわけである。裏を返せば、その他のピラミッドの暦年代はすべからく曖昧であるため、各ピラミッドの年代的前後関係が今後修正される可能性も大いにあり得る。こうした状況においては、前掲の王名表及び王（女王）の即位順も暫定的なものに過ぎず、読者においては一定の注意が求められている。

Ⅳ. シャバカとシャバタカの即位順をめぐって

本稿を閉じる前に、冒頭で触れた即位順の議論へ立ち戻ろう。ここであらかじめ断っておくと、この議論は現在進行形でありかつクシュ王国からアッシリア帝国までを広く対象としているため、筆者の管見に及ばぬ箇所も多数存在する。しかしそうであっても、クシュ王国学徒としての立場から現状を俯瞰しておくことは、エジプト学のみならずアッシリア学をも含めた本邦諸学兄との対話を深めるうえで確かな布石となるであろう。こうしたことから、浅学を顧みず紹介の労を取ることにする。

シャバカとシャバタカの即位順をめぐる近年の議論は、2013年に出版された一つの論文に端を発している。「第25王朝の編年に関する一提案」と名付けられたこの論文は、冒頭で述べたようにドイツの在野研究者が執筆したものであるが（Bányai 2013)、彼によれば、シャバカとシャバタカの前後関係は逆転させるべきであるという。それは一体何故なのか。この疑問を掘り下げるためにはまず、一点の史料にご登場願わなければならない。『エジプト史』である。デルタ地方中央部のセベニトスで生まれ、後にヘリオポリスの大司祭としてプトレマイオス朝に仕えたマネト（Manetho）がしたためたこの史料は、古代エジプトの盛衰を31の歴代王朝にまとめたもので、幾つかの抜粋が後世の手によって残されている。そして、重要なのはこの抜粋に、第25王朝時代の王としてSabacôn、Sebicôs、Taracusが記されていることである（Waddell 1940: 166-167)。Taracusがタハルカを指していることは論を俟たないが、SabacônとSebicôsの綴りは似通っており、ここからシャバカとシャバタカを峻別することは極めて難しい。ならばなぜシャバカがシャバタカの前任者であったと、あるいはなぜ、シャバタカがタハルカの前任者であったとこれまで見做されてきたのだろうか。

その大きな根拠とされるのが、カワ（Kawa）で発見された一枚の石碑である。タハルカの治世6年に建立されたこの石碑には数多くの歴史的出来事が刻まれているが、重要なのはそこに、シャバタカの勅令を受けヌビアからテーベへ馳せ参じるタハルカの姿が描写されていることである（Macadam 1949: 15)。言葉を変えれば、シャバタカがタハルカを寵愛していたことを示唆するこの描写が大きな根拠となり、シャバタカがタハルカの前任者、したがってSebicôsがシャバタカ、Sabacônがシャバカであるという通説が形成されてきた。

そして、この通説に異を挟んだのが上述した論文である。エジプト学の常識を大きく揺さぶるこの論文は、出版翌年に早くも国際会議で議題として取り上げられているが（Bányai et al. 2015)、シャバカからシャバタカへという即位順の理解が多くの困難を伴っていることを指摘している（Bányai 2013: 47-52)。第一に、先に述べたようにSabacônとSebicôsの綴りは似通っているため、ここからシャバカとシャバタカを見分けることは極めて難しい。第二に、サルゴン2世によれば、アッシリア帝国とクシュ王国の交易はシャバタカの治世まで途絶えていたとされるにもかかわらず、シャバタカの前任者と目されるシャバカの王名入り封泥がニネヴェ（Nineveh）で出土している。この出土は、シャバカとシャバタカの前後関係を入れ替えない限りサルゴン2世の証言と相容れない。第三に、シャバカの治世7年に購入された奴隷がタハルカの治世2年（もしくは6年）に売却されたという記録が史料として残されているが、両者の間にシャバタカの治世を考慮するとこれは早くとも27年後となり、奴隷売買の期間としては余りに長すぎる。第四に、カルナックで出土したある石製彫像には、シャバカ、タハルカ、タヌタマニの王名が順に列記されているが、シャバカとタハルカの間に本来加えられるべきシャバタカの王名が何故か見当たらない。この事実もまた、シャバタカをタハルカの前任者とする通説の誤りを示唆するものである。以上のように、如何わしい例を挙げれば枚挙にいとまがないが、通説に対する疑義が近年次々と提示されている点はいくら強調しても強調し過ぎることはないであろう。

実際、シャバカとシャバタカの前後関係を逆転させよう

とする立場は多くの賛同者を得ている（Payraudeau 2014; Broekman 2015, 2017; Jansen-Winkeln 2017）。筆者の狭い管見に触れる限りでも、F. ペロドー（Payraudeau）や G. P. F. ブロークマン（Broekman）がこの方向性において新たな歴史考証に着手しているし、これまで否定的立場を貫いてきた K. ヤンセン・ヴィンケルン（Jansen-Winkeln）も、この主張を認めざるを得ないと近年発言するに至っている。つまり現時点においては、上記の立場を支持する声こそあれど懐疑的な意見は影を潜めつつあるのである。だからといって論争が決着したわけではなく、その成り行きを慎重に見守ってゆくことが賢明な判断であることに変わりはないが、本邦においても、このような学問的潮流を頭の片隅において研究を進めてゆかなければならないことを改めて強調しておく。

V．おわりに

以上、アル＝クッル、ヌリ、ジェベル・バルカル、メロエという４つの王家埋葬地を通じてクシュの歴史的諸問題に触れてきた。各論点を深く掘り下げるというよりはやや散漫に終始したきらいがあるものの、これは埋葬地全体の存続期間が一千年にも及ぶためで、議論を進めるうえでは選択的手段を採らざるを得なかった。各論点の更なる掘り下げは今後の課題としたい。シャバカとシャバタカの即位順をめぐる議論は我が国においてまだ十分に認識されているとは言い難いが、本稿がその責務を幾ばくか果たすものとなれば、そして、エジプト学やアッシリア学を専攻する本邦諸学兄との対話に多少なりとも資するものとなれば、これに勝る喜びはない。

脱稿後しばらくして、Jurman, C. 2017 The Order of the Kushite Kings According to Sources from the Eastern Desert and Thebes. Or: Shabataka was here first! *Journal of Egyptian History* 10/2: 124-151. という論文が出版された。その題名からわかるように、ここでも、シャバタカがシャバカに先行するという結論が支持されている。

註

1）以上に示した諸王は、その名前の末尾を「カ」でなく「コ」とする研究者もおり混乱が生じているがこれはいずれも正しい。誤解を恐れず述べればエジプト学者は前者を、クシュ王国研究者は後者を用いる傾向にある。便宜上本稿では、我が国の慣習に習いシャバ「カ」、シャバタ「カ」、タハル「カ」という綴りを採用した。なお、かつてピアンキはピイ（Piye）と表記することが慣わしとなっていたが、近年では再びピアンキという綴りが好まれつつある。

参照文献

Bányai, M. 2013 Ein Vorschlag zur Chronologie der 25. Dynastie in Ägypten. *Journal of Egyptian History* 6/1: 46-129.

Bányai, M., G. P. F. Broekman, D. Kahn, K. Jansen-Winkeln, C. Jurman, H. Neumann, L. Török, M. Becker, A. I. Blöbaum, and A. Lohwasser 2015 Die Reihenfolge der kuschitischen Könige. *Journal of Egyptian History* 8/2:115-180.

Broekman, G. P. F. 2015 The Order of Succession between Shabaka and Shabataka: A Different View on the Chronology of the Twenty-Fifth Dynasty. *Göttinger Miszellen* 245: 17-31.

Broekman, G. P. F. 2017 Genealogical Considerations regarding the Kings of the Twenty-Fifth Dynasty in Egypt. *Göttinger Miszellen* 251: 13-20.

Budka, J. 2014 Egyptian Impact on Pot-breaking Ceremonies at Kurru? A Re-examination. In J. R. Anderson and D. A. Welsby (eds.), *The Fourth Cataract and Beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, 641-654. British Museum Publications on Egypt and Sudan 1. Leuven-Paris-Walpole, Peeters.

Chapman, S. E. and D. Dunham 1952 *Decorated Chapels of the Meroitic Pyramids at Meroë and Barkal*. Royal Cemeteries of Kush 3. Boston, Harvard University Press.

Dunham, D. 1950 *El Kurru*. Royal Cemeteries of Kush 1. Boston, Harvard University Press.

Dunham, D. 1955 *Nuri*. Royal Cemeteries of Kush 2. Boston, Harvard University Press.

Dunham, D. 1957 *Royal Tombs at Meroë and Barkal*. Royal Cemeteries of Kush 4. Boston, Harvard University Press.

Dunham, D. 1963 *The West and South Cemeteries at Meroë*. Royal Cemeteries of Kush 5. Boston, Harvard University Press.

Griffith, F. Ll. 1937 *Catalogue of the Demotic Graffiti of the Dodecaschoenus*. Oxford, Oxford University Press.

Heidorn, L. 1994 Historical Implications of the Pottery from the Earliest Tombs at El-Kurru. *Journal of the American Research Center in Egypt* 31: 115-131.

Jansen-Winkeln, K. 2017 Beiträge zur Geschichte der Dritten Zwischenzeit. *Journal of Egyptian History* 10: 23-42.

Kendall, T. 1999 The Origin of the Napatan State: El Kurru and the Evidence for the Royal Ancestors. In S. Wenig (ed.), *Studien zum antiken Sudan: Akten der 7. Internationalen Tagung für meroitistische Forschungen vom 14. bis 19. September 1992 in Gosen/bei Berlin*, 3-117. Meroitica 15. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.

Kendall, T. 2008 Why Did Taharqa Build His Tomb at Nuri? In W. Godlewski and A. Łajtar (eds.), *Between the Cataracts: Proceedings of the 11th Conference for Nubian Studies, Warsaw University, 27 August-2 September 2006*, 117-147. Warsaw, Warsaw University Press.

Macadam, M. F. L. 1949 *The Temples of Kawa I: The Inscriptions*. London, Oxford University Press.

Payraudeau, F. 2014 Retour sur la succession Shabaqo-Shabataqo. *Nehet: Revue numérique d'Égyptologie* 1: 115-127.

Pope, J. 2014 *The Double Kingdom under Taharqo: Studies in the History of Kush and Egypt, c. 690–664 BC*. Culture and History of the Ancient Near East 69. Leiden-Boston, Brill.

Priese, K.-H. 1977 Eine verschollene Bauinschrift des frühmeroitischen König Aktisanes (?) vom Gebel Barkal. In E. Endesfelder, K.-H. Priese, W.-F. Reineke and S. Wenig (eds.), *Ägypten und Kusch*, 343-367. Schriften zur Geschichte und Kultur des alten Orients 13. Berlin, Akademie-Verlag.

Reisner, G. A. 1918 Preliminary Report on the Harvard-Boston Excavations at Nûri: The Kings of Ethiopia after Tirhaqa. *Harvard African Studies* 2: 1-64.

Reisner, G. A. 1923 The Meroitic Kingdom of Ethiopia: A Chronological

Outline. *Journal of Egyptian Archaeology* 9: 34-77, 157-160.

Török, L. 1997a *The Kingdom of Kush: Handbook of the Napatan-Meroitic Civilization*. Handbuch der Orientalistik Erste Abteilung: Der Nahe und mittlere Osten 31. Leiden-New York-Köln, Brill.

Török, L. 1997b *Meroe City: An Ancient African Capital. John Garstang's Excavations in the Sudan* EES Occasional Publications 12. London, Egypt Exploration Society.

Török, L. (forthcoming) The Periods of Kushite History. In M. Honegger (ed.), *Nubian Archaeology in the 21st Century: Proceedings of the 13th International Conference for Nubian Studies*. Leuven-Paris-Walpole, Peeters.

Waddell, W. G. 1940 *Manetho*. Cambridge, MA, Harvard University Press.

Wenig, S. 1967 Bemerkungen zur Chronologie des Reiches von Meroe. *Mitteilungen des Instituts für Orientforschung* 13: 1-44.

Wenig, S. 1973 Nochmals zur 1. und 2. meroitischen Nebendynastie von Napata. In F. Hintze (ed.), *Sudan in Altertum*, 147-152. Meroitica 1. Berlin, Akademie-Verlag.

齋藤久美子　2013「古代エジプト第 25 王朝の王位母系継承を考える―親族名称に基づく新提案―」『オリエント』56 巻 2 号　53-64 頁。

齋藤久美子　2014「クシュの碑文を母系制として読む―即位の記録と「アララとアメン・ラーの契約」―」『エジプト学研究』20 号　83-98 頁。

坂本 翼
独立行政法人国立文化財機構
アジア太平洋無形文化遺産研究センター
Tsubasa SAKAMOTO
International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region,
National Institutes for Cultural Heritage